様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　3　月　31　日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2007　～　2010
課題番号：19320133
研究課題名（和文）　　都市空間における女性の商品化
—米軍基地周辺遊興街の社会・歴史地理—
研究課題名（英文）Commercializing Women in Urban Spaces: Socio-historical Geography of the U.S. Military Base and Neighboring Amusement Center

研究代表者　吉田　容子（YOSHIDA YOKO）
奈良女子大学・文学部・准教授
研究者番号：70265198

研究成果の概要（和文）：戦後，沖縄県内や本土につくられた米軍基地・施設周辺に現れた遊興街を対象に，女性の性が消費される空間がつくり出されていったプロセスを，社会地理学的および歴史地理学的な視点から追究した。また，売春や基地関連施設をめぐる地域住民の反応や活動の展開についても明らかにした。女性の性を消費する空間形成のプロセスや，そこに反映された諸力を明らかにするという研究の目的は，ほぼ達成されたと言える。地理学で従来タブー視されてきた性に関わる空間の解明に挑んだことで，日本でのフェミニスト地理学の発展に意義ある成果を残せたものと確信する。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the process that space where women prostituted themselves after the war was shaped around the U.S. Military base in Okinawa Prefecture and the Mainland of Japan, from the viewpoint of social and historical geography. And, this study explained the reaction and activities of local residents for prostitutes and the military bases. The purpose of this study was almost attained by explaining the process of production of gendered spaces and revealing the various powers reflected in those spaces. We believe that this attempt contributed to the development of feminist geography in Japan by our challenge to reveal the gendered space from the view point of gender and sexuality.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
総　計	6,400,000	1,920,000	8,320,000

研究分野：都市社会地理学，フェミニスト地理学
科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学
キーワード：都市空間，米軍基地，遊興街，ジェンダー関係，社会・歴史地理学的視点，フェミニスト地理学

１．研究開始当初の背景

女性の性が金銭と交換可能なモノとされること，すなわち商品とみなされること（「女性の商品化」）は，古くから世界の至るところでみられてきた。そして今日も「女性の商品化」は続いている。女性の性がこのような扱いをされてきたこと，また現在もされていることは許されるはずがない。なぜ女性の性は商品化されるのだろうか，そこにどのような権力関係が働いているのだろうか。

海外では，「女性の商品化」について，売春という行為の実践に関わる諸主体を具体的

な研究対象とした社会学的研究がいくつかある。『売春の社会学』(マンシニ,J.G.著，寿里訳，白水社,1964)は，世界の諸都市を例に，売春婦が実際どのような仕事をしているのか，また，彼女たちを管理する売春組織の仕組みとはいかなるものかに言及した。『売春という思想』(ベル,J.著，山本・宮下・越智訳，青弓社,2001)は，家父長制によって女性に付与された「聖女」／「悪女」の二元性の問題や身体の病理といった観点から，売春に関わる女性の身体を読み・記述した。また，売春が発展途上国の国際観光産業と強く結びついていることや，貧困家庭の女性が性労働に就かざるをえない社会構造に注目した『売春―性労働の社会構造と国際経済』(トゥルン，T.D.著，田中・山下訳，明石書店,1993)がある。地理学者による研究では，資本主義経済下のインドネシアのジャカルタで，利益を得た富裕階級が都市空間において下層階級を商品化し・搾取する一例として，売春婦の生活や売春組織下で管理される彼女たちの実態を詳細に調査した『ノーマネ，ノーハネ――ジャカルタの女露天商と売春婦たち―』(マレー,A.著，熊谷・内藤・葉訳，木犀社,1994)がある。

従来，性（セクシュアリティ）という概念そのものに汚れたイメージや偏見がつきまとい，売春行為やその実践者は道徳的に問題視されたがゆえ学問的にも周辺視されてきたことにかんがみれば，これらの先行研究は，「女性の商品化」について検討する学問的意義を提示した点で評価できる。すなわち，発展途上国における貧困家庭出身の女性による売春の主な利用者とされる国際的な顧客や，古い家父長制のもとで売春婦が扶養せねばならない家族について明らかにした先述の先行研究は，性やジェンダーをめぐる多様な権力関係が都市空間に存在していることを指摘し，社会科学の視点から，女性を商品化する社会・経済構造を解明することに挑んだのである。

先述の先行研究から得られた知見から，売春に代表されるような「女性の商品化」は，一般に都市空間でみられることが多い。海外の地理学研究では，都市の特定地区に「売春の空間」が生み出される過程を検証し，売春が都市秩序の形成にいかに関与しているかを論証したものがある(Hubbard.P.,1998, Sexuality, immorality and the city : red-light districts and the marginalization of female street prostitutions. *Gender Place and Culture*, 5-1, 55-72., Hubbard,P. and Sanders,T., 2003, Making space for sex work : female street prostitution and the production of urban spaces. *International Journal of Urban and Regional Research*, 27-1, 75-89.)。こうした研究は，一般社会から「必要悪」とされる売春婦がいかに彼女たち特有の空間を生み出し，そこで売春や日常生活を実践しているか，また，その空間にはどのような権力関係が具現化されているかという，空間についての概念に関する知見も示唆している。

では，日本におけるこの方面の研究はどうだろうか。社会学の領域では，性（セクシュアリティ）やジェンダーと身体の問題を関連させ，「女性の商品化」について積極的な議論が行われている。一方，地理学では，加藤の『花街―異空間の都市史―』(朝日選書，2005)に代表されるよう，歴史地理学的な観点や手法から都市空間における花街(一部に遊郭も含む)の成立・発展過程を追う研究がある。しかしながら，歴史地理学的な研究の枠組みのため，花街という空間を性やジェンダーの視点から検討する試みに乏しい。社会地理学的な視点からアプローチすることで，女性の性を消費する空間形成のプロセスや，そこに反映された諸力を明らかにできよう。

２．研究の目的

本研究の目的は，戦後，沖縄県内や本土につくられた米軍基地・施設の周辺に現れた遊興街を対象として，女性の性が消費される空間がどのようにつくり出されたのかを，社会地理学（とくにジェンダーの視点）および歴史地理学的観点から明らかにすることである。この研究目的を遂行するための考察の着眼点として，以下のことがあげられる。

終戦後，米軍基地・施設の周辺に遊興街がどのように形成され・発展したかを，日本と米国・米軍の政治的・経済的背景や戦後の都市計画史の面から把握すること，なかでも，米軍基地・施設がもたらす地域経済への影響は見逃せない。また当時，基地・施設周辺住民たちの米兵や遊興街の女性に対する「まなざし」がどのようなものであったかを明らかにし，性やジェンダーをめぐる多様な権力関係が当時の都市空間のなかに存在していたことを指摘する。そして，基地や売春をめぐる住民の反応や反対運動の展開にも注目する必要がある。さらに，基地周辺遊興空間の消費と観光の関係性についても検証する。

以上の点に着眼し，社会科学の視点から女性を商品化する社会・経済・政治構造を解明することが本研究の大きな目標である。

研究の役割分担課題は，以下のとおり。

(1)基地周辺遊興街の成立過程にみるジェンダー等の権力関係・・・吉田容子

(2)ジェンダー関係が投影された都市空間の

分析・・・影山穂波
(3)近世・近代の遊廓に起因する赤線・青線地区成立の歴史地理・・・加藤政洋
(4)基地周辺遊興空間の消費と観光の関係性
・・・神田孝治
(5)軍事基地・演習場をめぐる地域住民の反対運動・・・中島弘二

３．研究の方法

沖縄県内および本土内の米軍基地・施設の所在都市・地域の中から，沖縄県那覇市，同県沖縄市，同県金武町，神奈川県横須賀市，山口県岩国市，広島県呉市，長崎県佐世保市，大分県玖珠町，山梨県中野村を選定し，資料収集や現地調査を実施した。

本研究が対象とする期間は，おもに終戦直後から売春防止法制定までのため，研究の方法としては当時の資料の収集が中心となった。具体的には，当時の地方新聞，市町村誌，住宅地図をはじめ，その他関連する文献を収集するとともに，現地での観察や聞き取りによる情報収集である。

４．研究成果

研究の役割分担課題ごとに成果の概要を述べたあと，成果の一端をまとめた研究成果報告書（冊子体，平成 23 年３月作成）に収録の論文について，その要旨を掲載しておく。

(1)基地周辺遊興街の成立過程にみるジェンダー等の権力関係

終戦直後，連合軍が駐留したり，米軍基地や関連施設が置かれた沖縄県沖縄市，同県金武町，長崎県佐世保市，山口県岩国市，広島県呉市，神奈川県横須賀市，また，朝鮮戦争時に帰休兵を受け入れた経緯がある奈良市など，いくつかの研究対象地を現地調査し，基地や関連施設の周辺に歓楽街がつくられるに至った社会・政治的背景や，歓楽街形成のプロセス，またそこで自らの性を商品として売らざるをえなかった女性たちと兵士，地域住民，行政などの関係性について，主に当時の地方紙から情報を収集・整理を行った。

以下は，研究成果報告書（冊子体）に掲載の２論文の各要旨である。

＊「米軍施設と周辺歓楽街をめぐる地域社会の対応―「奈良ＲＲセンター」の場合―」

研究の目的は，1952 年５月１日に奈良市内に設置された朝鮮戦争帰休兵向けの休養・回復施設「ＲＲセンター」と，その周辺歓楽街を拠点に活動したパンパン，ポン引き，顧客であった米兵に注目し，彼/彼女ら各々に向けられた「まなざし」を明らかにし，歓楽街における彼/彼女らの存在が地域住民に，また「古都」や「観光都市」としての奈良にどのような影響を及ぼしたのか，さらに，地域住民をはじめ奈良市や奈良県，また日本政府がそれをどのように受け止め対処したのかを，明らかにすることである。

センターが奈良市旧横領町に設置されるやいなや，歓楽街が現れた。そこでは，組織化したポン引きやパンパンが米兵を強引に誘っているとして地元紙の記事に書かれ，それゆえ，地域住民もポン引きやパンパンを不道徳な者と見ていた。歓楽街は，ポン引きに管理されたパンパンが自らの性を「商品」として米兵に売る空間であったといえよう。こうした歓楽街は子どもたちの教育上の弊害となり，また，古都であり国際観光都市である奈良のイメージを壊し，近隣住民を悩ませた。当該地域の人々は，歓楽街を出現させた直接の原因はセンターの存在だとして，センターの移転・廃止を求めた。

奈良ユネスコ協力会が，歓楽街，パンパン，ポン引きによる子どもの教育への影響を主たる理由にあげて，センターの移転・廃止を求める活動の中で主導的役割を果たしたことは興味深い。協力会は元来，奈良の文化・自然遺産の保存を目的として活動する市民団体であることから，奈良の古文化を守る必要性を強調した。そして，活動の目標を，センターの他地域への移転ではなく，センター自体の廃止に置いた。同様のＲＲセンターがあった横浜や小倉とは異なる文脈，すなわち古文化を守るという観点から，センター反対の活動が展開されたと言えよう。一方，ジェンダーの視点から，センターの移転・廃止を求める諸活動の中で，自らの性を売らざるをえないパンパンの抱える問題が前面に出されなかった点を指摘したい。

センターの移転・廃止をめぐる政府や米軍当局の対応は幾度も急転し，その度に当該地域の住民，歓楽街店舗の経営者，パンパン，ポン引きを翻弄させた。センターが横領町から神戸に移されることが正式に決まると，今度は米軍海兵隊が奈良市内にしばらく駐留することになった。彼らは夜中，女性を求めて民家や病院に侵入した。このことは，軍隊が存在する限り，軍事に内在する暴力や性をめぐるジェンダーの問題は解決されないことを暗示している。

＊「敗戦後の日本における都市空間の「軍事化」―朝鮮戦争時の佐世保市の風紀・衛生取締りに着眼して―」

本研究では，第二次世界大戦後，朝鮮戦争の兵站基地として佐世保が軍事化されていく過程で，行政や市民が戦争や軍隊に直接参

与したわけではないにもかかわらず，佐世保という都市空間がいかに「軍事化」されていったかを，敗戦直後から朝鮮戦争時の駐留外国人兵士を相手とした売春女性たちをめぐる風紀・衛生面での種々の取締り政策に着眼して，行政資料や地元新聞紙から整理した。この作業の中で見えてきたのは，以下に述べるよう，佐世保という都市空間が「軍事化」されていく過程であった。

佐世保の街に連合国軍や国連軍が駐留することによって，都市空間が物理的に占拠され軍事のために使用されたことは，いわば可視的な軍事化といえよう。こうした可視的な軍事化の過程と相俟って，軍事を担う兵士に向けたさまざまな制度や管理が軍当局側からなされる一方，佐世保市行政ならびに各種業者は，兵士の消費意欲を掻き立てようと，さまざまな試みを行った。そのなかで本研究が着眼したのは，外国人兵と彼らを相手にする女性（パンパン）をめぐる風紀・衛生の取締りであった。朝鮮戦争に参戦する兵士を慰安する役割として，また，ドルを消費させる戦略として女性が宛われたものの，兵士と女性の間での性病の流行，街娼やポン引きの横行といった問題に，米軍当局や佐世保市行政は頭を抱えることになった。

佐世保の街でみられたこうした一連の動きは，可視的な軍事化の背後にある，もう一つの「軍事化」として捉えることができよう。直接戦地に赴き参戦するわけではない人々（たとえば，市行政，一般市民，貸席業者，パンパンなど）が，気付かないうちに兵士を慰安（性的な慰安や，消費や娯楽という面での慰安）に関わっていたのである。とくに朝鮮戦争時は，佐世保船舶工業株式会社が中心となって入港する艦船の修理を行うなどの面でも，「軍事化」に関わっていた。敗戦直後から朝鮮戦争にかけ，可視的な軍事化とともに，もう一つの「軍事化」が都市空間において諸力とのせめぎ合いの中で進行していたといえよう。（吉田容子）

(2)ジェンダー関係が投影された都市空間の分析

那覇市と横須賀市を事例に，売春防止法制定前に米軍基地周辺歓楽街において認められた売買春の実態や，それへの住民や行政の対応について，当時の新聞や行政記録から整理するとともに，同法の制定が多方面に及ぼした影響について，沖縄県の事例から明らかにした。また，同法施行以降，それまで売春に関わってきた女性の救済および自立支援を図る目的で設置された婦人保護施設についても文献調査を行った。

以下は，研究果報告書（冊子体）に掲載の論文「沖縄における売春防止法の制定とその影響」の要旨である。

1956 年に日本本土で制定された売春防止法は，沖縄では，1972 年日本復帰に際して適応された。そこで本研究では，沖縄における売春防止法制定をめぐる動向とその影響を検討した。当時の新聞記事と買売春にかかわる資料を分析し，売春防止法の制定が，前借金を無効にすることを可能としたものの，買売春は形を変え存続し続けたことが明らかとなった。売春防止法は，買売春を禁止するよりも風俗を目に見えない形にすることに寄与したという側面を持ち，買売春の解消にはつながらなかった。

沖縄においては，買売春をめぐる権力関係に加え，米軍基地という国家を超えた権力の存在が，買売春を複雑不可視なものにする役割を果たしていた。基地への依存は復帰後も継続し，米軍主導の性の管理体制が生み出され，一方，風俗産業における暴力団との深いつながりをもった形態で，女性の管理が維持され，重層的な権力関係のもとで沖縄的な買売春が展開されていった。（影山穂波）

(3)近世・近代の遊廓に起因する赤線・青線地区成立の歴史地理

近代的な都市空間編成における「遊廓」の位置づけを明確にすることが，戦後の集団売春街への展開を把握するうえでも必要なことから，近代以降についても調査・研究を行った。さらに，米軍統治下における沖縄をフィールドに，基地周辺に建設された歓楽街の分析から，軍政府・民政府の施策ないし方針の特徴を明らかにし，本土とは異なる空間の生産過程があることをつきとめるに至った。

以下は，研究成果報告書（冊子体）に掲載の論文「戦後沖縄における料亭街の形成」の要旨である。

戦後の沖縄では，バーやスナック，居酒屋や小料理屋，旅館といったサーヴィス業の集積する繁華な地区（「歓楽街」）が，米軍基地の周辺を含めて各地に形成された。それらは「社交街」とも呼ばれ，那覇市の中心商店街である国際通りに隣接した「桜坂」などは，その代表的な例である。

歴史的に見ると，社交街のなかには買売春の行なわれるところが含まれたほか，たとえば宜野湾市の「真栄原社交街」のように，近年にいたるまで売春の実態が度々明らかになるような歓楽街も，少なからず存在していた。本研究では，ところによってはそのように買売春の温床ともなった地区の形成過程を，戦後の都市形成期にまでさかのぼり，そ

れらの成立当初の景観を復原しつつ，歴史地理学的に検討している。

具体的には，初期の風俗営業を代表する業態であった「料理屋」ないし「料亭」の存在様態に着目し，佐敷村の馬天港，浦添村の泉町，そしてコザの八重島に成立した料亭街について検討を加えている。その結果，一部例外はあるものの，軍事基地の建設にともなう都市化の過程で，関連する業者が市街地からなかば放逐されるようなかたちで（場合によっては用地があてがわれて），料理屋街が集団的に形成される素地が生まれ，そして都市の発展とともに隆盛をきわめていたことが明らかとなった。重要なのは，業者を隔離・囲繞することによって，買売春の地理的基盤が確固としたものとなり，むしろそれを助長するような役割を果たしたということである。そして，いずれもが自然発生的にできたというわけではなく，都市計画にまつわる空間的想像力によって周到に計画，布置されたという点は，特に強調しておく。(加藤政洋)

(4)基地周辺遊興空間の消費と観光の関係性

那覇市，山梨県南都留郡山中湖周辺，和歌山県白浜町，東京都立川市，横須賀市で現地調査および資料収集を行ない，基地周辺の遊興空間の消費と観光の関係性を，米軍駐留の前・後の変化に焦点をあてて追究した。

以下は，研究成果報告書（冊子体）に掲載の論文「キャンプ・マックネア周辺の遊興空間の成立と地域社会－山梨県南都留郡中野村山中地区を事例として－」の要旨である。

本研究では，北富士演習場に米軍が進駐したことにより成立した遊興空間として山梨県中野村山中地区を取り上げ，その成立過程と地域社会への影響について，関係する様々なまなざしに注目して検討した。その結果，この地は戦前期から観光地化が進行していたが，キャンプ・マックネアへの米軍の駐屯にともない，観光地としての機能は後退し，その景観もイメージも米軍の遊興空間となっていたことが確認された。また，教育問題を中心に遊興空間の地域への悪影響が社会的に注目されたが，地域住民は，遊興空間に多様な感情を抱くと同時に，当該地域の風紀問題を強調する外部からのステレオタイプ化されたまなざしにしばしば反感を覚えていたことも認められた。　(神田孝治)

(5)軍事基地・演習場をめぐる地域住民の反対運動

沖縄県名護市辺野古の米軍海上基地建設予定地を取り上げ，反対運動の歴史的過程や現状を明らかにするとともに，海上基地建設反対運動について建設予定地周辺の環境保護をめぐる反対運動と地域住民との関係を明らかにした。また，米軍占領下の大分県における軍事基地および軍事演習場を取り上げ，軍事暴力と地域住民の生活世界の関係を明らかにすることを通じて，軍事基地・軍事演習場がもたらす生活世界の軍事化の様態とそこからの離脱の契機を模索した。

以下は，研究成果報告書（冊子体）に掲載の論文「米軍占領下の軍事演習場をめぐる軍事暴力と地域住民の対応―大分県を事例として―」の要旨である。

本研究では，主として日本敗戦後の米軍（連合国軍）の占領期における大分県の軍事演習場をめぐる軍事暴力の実態と地域住民の日常生活に対するその影響，およびそうした軍事暴力に対する地域住民の対応を描き出すことで，軍事化された空間と地域住民の生活世界との重層的かつ対立的な関係を明らかにすることを試みた。具体的には米軍占領期に大分県内の米軍基地や演習場に関連して発生した事故や犯罪，障害の事実を検討することで，演習場をめぐる軍事暴力の実態を明らかにするとともに，それが地域住民の日常生活に対しておよぼす影響について検討をおこなった。その結果，地域住民は苛酷な軍事暴力に耐え，軍事的支配と何とか折り合いを付けながらも，ときに陳情活動や抗議行動，異議申し立てをおこない軍事暴力に抵抗してきたことが明らかとなった。そうした軍事暴力への地域住民の抵抗は，政党や労働組合を中心とする政治運動や補償金や見返りを求める補償要求運動とは異なり，農地の返還や接収解除などを通じて土地を含めたみずからの生活世界そのものを回復しようとする運動であり，いわば生活世界の側からの抵抗と呼べるものであったと考えられる。

(中島弘二)

《研究の総括および反省と展望》

「女性の商品化」という問題はあまりに大きすぎ，研究期間内に人文地理学の視点からこの問題にどこまで切り込めたか，反省すべき点も多くある。とはいえ，従来の地理学では性（セクシュアリティ）やジェンダーに関わることは私的なことで，ディシプリンとしての地理学では取るに足らない些細な問題であったこと，また，男性研究者が圧倒的に多い当該分野では，(女性の)性への関心が特になかったこと，あるいは，こうした空間への言及が必要と知りながらも男性研究者があえて踏み込めなかったことなど，つまり，性に関わる空間がタブー視されてきたので

ある。本研究では，2名の女性に加え3名の男性が，従来タブー視されてきた空間の解明に挑んだ。この挑戦は，日本の地理学におけるフェミニスト地理学の発展にとって意義ある第一歩であると確信する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計６件）

①影山穂波，　沖縄における売春防止法の制定とその影響，表現と文化（椙山女学園大学国際コミュニケーション学部研究論集),査読無，第8巻，2011，19-32.

②吉田容子，　米軍施設と周辺歓楽街をめぐる地域社会の対応―「奈良RRセンター」の場合―，　地理科学，査読有，第65巻，2010，245-265.

③中島弘二，　沖縄における自然保護と基地反運動，地理科学，査読有，第65巻，2010，231-241.

④神田孝治，　沖縄イメージの変容と観光の関係性－米軍統治時代から本土復帰直後を中心として－，観光学，査読有，第4巻，2010，23-36.

⑤吉田容子，沖縄の米軍基地周辺歓楽街に関する一考察－沖縄県金武町を事例に－，奈良女子大学地理学・地域環境学研究報告，査読無，第Ⅶ号，2010，113-129.

⑥中島弘二，沖縄における自然保護と基地反対運動の展開－ジュゴン保護運動を事例として－，金沢大学文学部論集 史学・考古学・地理学篇，査読無，第28号，2008，77-94.

〔学会発表〕（計９件）

①中島弘二，沖縄における自然保護と基地反対運動－ジュゴン保護運動とエコツーリズムをめぐって－，地理科学学会秋季学術大会シンポジウム，2009年11月28日，広島大学.

②中島弘二，抵抗の場としての自然－名護市辺野古の海上基地建設反対運動をめぐって－，日本地理学会秋季学術大会，2009年10月24日，琉球大学.

③加藤政洋，戦後那覇の都市計画と「場所の政治」－＜辻町＞の再興をめぐって－，日本地理学会秋季学術大会，2009年10月24日，琉球大学.

④中島弘二，The contested nature of Hijudai：people's struggles for nature in the Hijudai maneuver field, Japan., The 14th International Conference of Historical Geographers，2009年8月24日，Kyoto University, Japan.

⑤吉田容子，Spatial politics about Rest and Recuperation Center for occupation army : a case study of ancient capital Nara, Japan., International Sociological Association Research Committee on Urban and Regional Development，2008年12月18日，国際文化会館（東京）.

⑥吉田容子,Control of urban space in the period of reconstruction after the War, The 31st International Geographical Congress，2008年8月14，チュニス.

⑦影山穂波，沖縄の地域と女性－売春防止法をめぐる動き－，経済地理学会 中部支部例会，2008年4月26日，愛知大学車道校舎.

⑧吉田容子，都市空間にみるジェンダー関係，立命館地理学会大会，2007年12月1日，立命館大学衣笠キャンパス.

⑨吉田容子，戦後復興期における「特飲街」の形成と都市空間の秩序－沖縄県旧コザ市を事例として－，人文地理学会 都市圏研究部会 第25回部会,2007年11月17日，関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス.

〔図書〕（計４件）

①NAKASHIMA KOJI, Kokon Shoin （古今書院） (Tokyo), *East Asia: a critical geography perspective,* 2010, 161-175.

②加藤政洋，光文社新書，敗戦と赤線－国策売春の時代－，2009，244.

③吉田容子，昭和堂，敗戦後の奈良（奈良女子大学文学部なら学プロジェクト編『大学的奈良ガイド－こだわりの歩き方』所収），2009，253－267.

④中島弘二，古今書院，沖縄における草の根平和運動とエコツーリズムの展開（金沢大学文学部地理学教室編『自然・社会・ひと－地理学を学ぶ－』所収），2009，96-114.

〔その他〕

ホームページ

http://www.nara-wu.ac.jp/bungaku/sges/database/yoshida_01.html

６．研究組織

(1)研究代表者

吉田　容子（YOSHIDA YOKO）

奈良女子大学・文学部・准教授

研究者番号：70265198

(2)研究分担者

中島　弘二（NAKASHIMA KOJI）

金沢大学・人間科学系・准教授

研究者番号：90217703

影山　穂波（KAGEYAMA HONAMI）

椙山女学園大学・国際コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：00302993

加藤　政洋（KATO MASAHIRO）

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：30330484

神田　孝治（KANDA KOJI）

和歌山大学・観光学部・准教授

研究者番号：90382019